

## メディア制作教育論の歴史的な意味

### — D. バッキンガムを中心に —

時津 啓

本稿では、バッキンガムのメディア制作教育論の歴史的な意味を検討する。本稿は、当時のイギリスにおける社会的文化的状況の変化にメディア教育を位置づけた。とりわけ、ホガート、ホール、そしてサッチャリズムとの関係に注目した。

マスターマンは、メディアは作られていると考えた。メディア教育は、教師と生徒が制作者と消費者の間に存在する知識と権力の不平等に挑戦しようとする手段である。バッキンガムにとって、メディア教育は批判的理解と能動的参加を発展させることを目指している。それは、メディアの消費者として十分な判断を行い、解釈することを可能にする。そして自らメディアの制作者となることを可能にする。メディア教育は、生徒の批判的で創造的な能力を発展させるものである。

本稿は、当時の社会文脈と教育実践に焦点を当て、バッキンガムの歴史的意味を検証した。そして私たちは彼のメディア概念が商品としてのメディアということを明らかにした。彼はメディアへ批判的参加を作り出すことで、生徒へ商品としてのメディアへ抵抗しようとする。彼の理論には、メディアがいかに生徒の考えと活動を構築するのかを記述できないという限界を持っている。しかしながら、メディア技術を使用することで政治的な権力へ抵抗することに有効であるとした。

#### はじめに

本稿の目的は、バッキンガム (David Buckingham) が提唱するメディア制作の教育論におけるメディア概念を明らかにし、その歴史的な意味を検討することにある。ここで言うメディア制作の教育論とは、生徒が記者やプロデューサーに扮して新聞記事やテレビ番組などのメディア・コンテンツを制作し、メディア理解を目指す教育理論である(1)。

先行研究において、メディア制作の教育論は、メディア批判の教育論との関係で捉えられてきた。ここで言うメディア批判の教育論とは、メディア・テキストの読解を通して、マスメディアのイデオロギー性を批判する教育理論であ

る。その代表的存在である教育学者のマスターマン (Len Masterman) は、メディア制作の教育がマスメディア言説を模倣するだけとなっている点に注目する。彼によれば、メディア制作の教育実践は「三流のポップショーの模倣」に過ぎず、逆にマスメディアに対する神話を高めるだけである (Masterman 1980:140)。バッキンガムとロンドン大学時代の同僚であったファーガソン (Robert Ferguson) や教育学者の上杉嘉見も同意見である。ファーガソンにしたがえば、バッキンガムはマスメディアのイデオロギー性に対して注意を払わない傾向にあり、大人向けの番組に対しても、子どもへの影響はないと自信をもって述べる。そしてこう述



べる。「訴えたいのは、私たちが意味の標準化に対して敏感でなくてはならないということである」(Ferguson 1998:263)。上杉によれば、バッキンガムのメディア制作の教育論は、「社会の現状に対する批判を第一の目標に掲げることではない。それよりも現状を追認し、社会に適合する人間を育てる教育」論となっている(上杉 2008:10)。上杉にしたがえば、このような教育論は、政治経済的な観点からの考察を阻むことを目的としており、「進歩的」に見えるオーディエンスの多様性への注目は、むしろ社会の現状を肯定するきわめて「保守的な」メディア教育学を生み出してしまうとされる(上杉 2008:81)。

ここで筆者が注目すべきと考えるのが言語論的転回以降に教育哲学で展開されたメディアをめぐる議論である。二人の教育哲学者の研究を取り上げよう。今井康雄によれば、メディアは決して教育の外部にある異質な存在ではない。たとえば、教える者と学ぶ者との対面的な場面においても、教える者の指示などほとんどの教育行為は言語を中心としたメディアを介している。すなわち教育行為はメディアのなかに存在する(今井 2004:215)。今井は、私たちの発する言葉や書き記す言葉は、言語の意味に対する「直接性」に基づいて生成されていると考える(今井 1998:64)。つまり、コミュニケーションは言語内存在である、と。同時に言語は、意味を他者へ伝える役割をも担っている。言語における伝達のため、自らの意思と他者の解釈は「すれちがう」可能性がある。裏を返せば、メディアこそが学ぶ者の「自由」を担保することを可能にすると言う(今井 2004:36-38)。メディアは、意味が他者へと伝達されるプロセスにおいて「間接性」という特性も合わせ持つのである(今井 2004:6-7)。矢野智司は、言語が重要なメディアであることを認めた

うえで、「学習と教育という領域を考えるなら、そして幼児・子どもという存在を考えるなら、言語によって秩序づけられる以前の、あるいは言語による分節化によっては捉えきれない、メディアとしての身体の重要性も同様に問われるべきである」と述べている(矢野 2014:30)。

両者にしたがえば、メディアは人間の経験と体験を生み出す上で根幹をなす。両者にはメディアのプロトタイプを言語(今井)あるいは身体(矢野)と看做す決定的な差異がある。しかし、メディアを透明なものと捉えてきた従来の教育学を批判し、広義のメディア概念を用いて一たとえば今井はメディアを「中間にあって作用するもの」(今井 2004:1)と定義している一、教育概念や教育行為を再定義しようとする点で共通している。彼らに基づくならば、生徒の認識、意識、行為もメディアとの不可分な関係の中で、メディアの中で構成されていると捉えることができる。

この観点を手がかりにすれば、ファーガソンらはメディアと区別された主体を想定しており、言語論的転回以降のメディア概念を取り込めていない旧来の教育論と言えよう。同時に、バッキンガムの次のような言葉を看過することもできない。「メディア制作が可能にするのは、『口にできない』願望を語ることができ、全体化する言説を逸脱し、侵食する空間である。それでも子どもがそうしたプロセスを〈振り返り〉、自分たちが作り出す意味と楽しみの生成される条件を理解するように促すことは重要である。そしてそのためには、子どもがメタ言語を発達させる必要があるだろう。メタ言語は批判的言説の一形態であり、この言説によって何が起きているのかを表現し分析するのである」(Buckingham 2003:172 = 2006:213)。このように彼は、メディア批判の教育論とは異なる「批判的なもの」を模索する。しかしながら、



言語論的転回以降の教育哲学の議論からバッキンガムの見解を捉えるならば、抵抗や批判の拠り所として生徒が有する意識、つまり「振り返り」「メタ言語」を想定していると言える。バッキンガムもファーガソンらと同様に、「振り返り」や「メタ言語」がいかに関係によって構成されているのかを問えないのだ。ここにバッキンガムの理論的限界を見出すことができるだろう。

しかしながら、教育哲学の議論からメディア教育全般を一括りに批判するだけで十分だろうか。バッキンガムも含めたメディア教育論が有する理論的限界を当時のイギリスの社会的文脈に位置付けていく必要はないだろうか。なぜなら、バッキンガムのメディア制作の教育論は、イギリス固有の社会的文脈、すなわち政治的、文化的、思想的にも固有の文脈の中で展開されたからである。このことが重視されないまま、たとえ理論的限界や実践（不）可能性が示されたとしても、それは文脈を軽視した指摘に過ぎない<sup>(2)</sup>。さらにこの立場に立てば、バッキンガムの理論的限界や先行研究自体も抱える問題、すなわちメディア教育研究者の思考を制約しているものを単に理論の問題としてだけでなく、イギリス固有の社会的文脈から派生してした歴史的なものとして再解釈できるはずである。

結論を先取りするならば、本稿はサッチャリズム、若者たちによる新たな文化の形成、メディア技術の変化、メディア教育の制度化（カリキュラム化）などが複雑に重なり合う中で、バッキンガムのメディア制作の教育論は展開されたことを明示することになるだろう。そして、彼が商品としてのメディアと生徒の関係を探究していることを明らかにする。商品としてのメディアというメディア概念は、言語論的転回以降の教育哲学のそれとは異なる。本稿は、このメディア概念がバッキンガムを含めたイギリス

のメディア教育研究者の思考を制約すると同時に、言語論的転回以降の教育哲学が示していない教育実践を提示する可能性を示したい。

## I メディア教育の政治的・文化的・思想的背景

### 1. カルチュラル・スタディーズの伝統

バッキンガムは、1998年の論文「イギリスにおけるメディア教育—保護主義をこえて」の中で、イギリスにおけるメディア教育の傾向を二つの言葉で表現している。一つは「民主化」であり、もう一つは「防衛 (defensiveness)」である。ここで言う「民主化」とは「学校外の文化が次第に正当なものであると認められ、学校のカリキュラムにおいて考慮に値するものであると考えられる過程」である (Buckingham 1998:35)。この傾向は、1960年代および1970年代に広く受容され始めた「進歩的な」教育戦略と看做すことができ、メディア教育はその延長上に位置付けることができると言う (Buckingham 1998:35)。

次に「防衛」とは、メディアの否定的な影響に対して、さまざまな方法で子どもに予防接種 (inoculate) を施し、保護しようというものである (Buckingham 1998:36)。たとえばバッキンガムは、1933年に『文化と環境』を書いたリーヴィス (F.R. Leavis) とトムソン (Denys Thompson) に注目する。彼らは、ジャーナリズムや通俗小説、広告に素材を求め、授業課題を設定している。バッキンガムによれば、その使命は「文学的遺産と、それが体現・表象している言語、価値、国家繁栄の保存 (salvation) であった」 (Buckingham 1998:34)。事実、1960年に開催された「ポピュラーカルチャーと個人の責任」に関する教師たちの会議をまとめた論文集でトムソンは次のように述べている。「第一級の美術、文学、音楽など、広く認



められているもののでできるだけ多く接するよう  
にさせる。その目的は子どもに基準を与えるこ  
とである。それに照らすと、マスメディアの提  
供するものは小さく見えるだろう」(Thompson  
1964:20)。

このように文化を識別するという考えは、  
1950年代後半から1960年代に登場するケン  
ブリッジ大学のウィリアムズ (Raymond  
Williams)、バーミンガム大学現代文化研究  
センターのホガート (Richard Hoggart) にも  
引き継がれている。バッキンガムによれば、  
彼らは、イギリスの労働者階級の文化とハリ  
ウッド映画に代表されるアメリカ資本による文  
化を区別しようと考えていた (Buckingham  
1998:34)。そして彼らはトムソンらと同様に  
文化的識別を維持し、労働者文化を保護しよう  
とした。

ホガートは、1957年出版の著『リテラシー  
の使用』の中で、自らが生まれ育ったリーズ市  
郊外を中心とした労働者階級の言葉や文化に注  
目し、詳細な分析を行っている。たとえば、労  
働者階級に浸透している『ペッグ新聞』につい  
てこう言う。『ペッグ新聞』は「うすめられな  
い幻想とセンセーションのみを与えるだけと思  
われている。しかし、そうではない。こうした  
労働者階級の雑誌の方が、新しい雑誌より  
もいいところがある。確かに粗野な側面はあ  
るが、それ以上のものがある。本物の雑誌は、  
生活の肌触りのような感覚を持っているのだ」  
(Hoggart 2009(1957):103=2003:103 頁) (3)。

ホガートは、「通俗新聞や映画が活躍し始め  
てから半世紀が経とうとしているのに、労働者  
の日常会話は、わずかな影響しか受けていない」  
と言う (Hoggart 2009(1957):16=2003:28)。  
彼は、アメリカ資本に基づき商品化された文化  
が人々の生活に入り込みつつも、その文化に回  
収されない、労働者文化の根深さと労働者たち

の自律性を記述した(4)。

## 2. サッチャリズムの中のメディア教育

1968年にホガートからバーミンガム大学現  
代文化研究センターのセンター長を引き継ぐの  
がホール (Stuart Hall) である(5)。1978年に  
発表された『危機を取り締まる』はこのセン  
ターによる共同研究の成果である。この中で  
ホールらは、マスメディアの言説を分析し、「強  
盗 (mugging)」の意味内容がイギリス社会で  
いかに構築されたのかを考察している。そして、  
「強盗」の増加は外国人労働者、移民の増加と  
結びつけられていることを明らかにした。ホー  
ルは言う。「現実的に考察すれば、『強盗』と『黒  
人犯罪』という二つの語が今ではほとんど同義  
である、ということを否定する人はいないだろ  
う」(Hall 2002(1978):327)。マスメディアは  
恐怖と不安をあおりたて、人々の認識を固定化  
していく。毛利嘉孝の言うように、ホールが  
ここで見ていたのは、「危機」に直面したとき、  
それまでの統一的に見えていたカテゴリー (労  
働者階級) がバラバラにほどけ、別のカテゴリー  
(人種) を軸にヘゲモニー的な再編成がなされ  
る事態だった (毛利 1998:215)。

マスメディアは商品として情報を提供し、そ  
れを手がかりに人々の自発的な合意が形成され  
る。このような視座は、同時代の政治状況を分  
析するためにも、役立つものであった。『危機  
を取り締まる』の翌年1979年、保守党のサッ  
チャー (Margaret Thatcher) は首相に就任し、  
1990年の退陣まで戦後最長記録を更新し政権  
を担当する。ホールは、サッチャーの政治姿勢  
や政権運営を総称して「サッチャリズム」と名  
づけた。小笠原博毅の言うように、サッチャー  
の新保守主義の言説戦略との闘争は、同時代  
の文化分析を解読していくためには絶対不可  
欠の次元である (小笠原 1997:50)。景気後退



期、首相に選任されたサッチャーは、景気回復等の実績を残したわけではない(6)。しかし、彼女は三度の選挙で圧倒的勝利をおさめる。ホールはこの「ねじれ」に注目し、「人々が能動的に状況を危機的と認識し、能動的にサッチャー支持という応答をなした」と述べる (Hall 1988:43)。

ホールは、「サッチャリズム」が右派的な権威主義とポピュリズム的な性格を有していることに注目し、「権威主義的ポピュリズム」という概念を提出する。より権力の行使に訴えるという意味では権威主義的なのだが、同時に人々の政治・社会参加を促し、「合意」を志向する意味でポピュリズムである。このような異なる主義・主張が併存できたのはサッチャー個人が有する個性もあるだろうが、同時に次のような文化状況も影響している。

1970年代後半から1990年代のイギリスのテレビ環境は、原則BBCという公共放送によって独占されてきた (Buckingham 2011:185-186)。たとえば1970年代のイギリスにおいて、レゲエ、ブルースなどの黒人音楽は、アメリカと比べると、テレビ、ラジオから周縁化されていた。そのため若者の多くは、都市部を中心とした「海賊ラジオ局」を通して、これらの文化と接触した。さらに同時期のイギリスは、レコードのプレス費用が低下し、インディペンデント・レーベルの創生期でもある。またコピー機の普及は、容易なビラやチラシ作りを可能にした。この時期に生じたパンクロックの登場、レゲエの浸透、そしてクラブ文化の発展は、このような技術的・社会的与件に大きく突き動かされたものと言えよう (毛利 2003:226)。

1970年代後半から1990年代にかけてのイギリスは、サッチャーという個性的政治家が登場し、これまでの保守党と労働党の対立を前提とした政治風土とは異なり、双方の差異を越境

した国民の政治参加が実行された。ホガートらが明確に意識していた労働者 (階級) というカテゴリーが政治的再編・解体されていった。さらにイギリスのテレビ環境は、BBCの影響力が強く、他国よりもチャンネルは限定されており、メディア環境は多数のチャンネルを有するアメリカやカナダとは全く異なっていた。そのような制限された環境下で、レゲエ、ブルースなどの黒人音楽が若者の手によってイギリス流に加工・再構成されて独自の文化として浸透したのだ。

メディア教育学者らもこのような時代を生きていた。マスターマンは主著『メディアを教える』の中で次のように述べている(7)。「フォークランド紛争を経験し、私は学校だけではなく、社会のあらゆるレベルにおいて、マスメディアに対するクリティカルな理解を広めていく必要性を強く確信した」(Masterman 1989(1985):7=2010:12)。この紛争は、1982年にサッチャー政権下でイギリスとアルゼンチン間に生じた領土紛争である。マスターマンによれば、国民の60パーセントが紛争終結に向け軍事的行動をとることに反対していた。そのためサッチャー政権は、その世論を変える必要があった。マスメディアは、国際的なスポーツ・イベントや王室の行事などを報道することで、世論を変えていった。「政府の大義の正当性を国民へ納得させるには、嘘、隠ぺい、誤報を含むすべての報道情報、管理技術が必要であった」(Masterman 1989(1985):7=2010:12)。マスターマンは次のようにまとめている。「メディア教育は緊急の課題である。なぜなら、マスメディアが民主主義プロセスの中心にまで浸透しているからである。普通選挙はマスメディアがたまたま取り上げる『外的な』出来事であることをすでにやめている。むしろ、選挙日程、演説、討論会、遊説などはマスメディアの優先順



位や締め切りを考慮して計画され、本質的にメディア・イベントとなっている」(Masterman 1989(1985):11=2010:18)。

マスターマンは、サッチャー政権誕生後の1980年に『テレビを教える』、フォークランド紛争後の1985年『メディアを教える』を出版する。バッキンガムはマスターマンの『テレビを教える』を次のように評価している。「当時読んだ本で私に影響を与えたのは、1980年に出版されたマスターマンの『テレビを教える』であった」(Buckingham 2010:2)。そして、保守政権の時代という文脈、すなわち政治的な風土として右へとスウィングしていることを考えるならば、「広いラディカルな政治学によってラディカルな教育学がもたらされたことは素晴らしいことであった」(Buckingham 2010:3)。そして同時に次のような違和感も抱えていた。「マスターマンの教授理論と彼の描いた絵は、私の教師としての経験とは異なっていた。(中略)私の経験によれば、私たちが信じているよりも、事実生徒たちはたくさんを知っていました。また教室では、ラディカルな会話がなされていた」(Buckingham 2010:5)。

## II バッキンガム・マスターマン論争と広告制作の教育実践

### 1. バッキンガム・マスターマン論争

マスターマンの著『メディアを教える』の中には、次のようなエピソードが登場する。あるテレビ番組がマスターマンの授業を撮影しに来た。その際、ディレクターは生徒らの討論を撮影せず、誰かが面白い発言をするのを待った。面白い発言をすると討論を止め、撮影のために発言を繰り返すように求めた。マスターマンは言う。「私たちの日常の授業風景と

これほど異なるものはなかった」(Masterman 1989(1985):157=2010:190-191)。

このエピソードが示しているように、マスターマンによれば、「テレビ、新聞、映画、ラジオ、広告、雑誌は作られている」(Masterman 1989(1985):20=2010:28)。彼によれば、マスメディアの情報はどんなに自然であっても、それは多くのフィルタリング・プロセスの結果、すなわち人間による選択が行われた結果である。マスターマンによれば、マスメディアを批判的に見るためには、このような選択を表面化させ、その選択性を認識させる必要がある(Masterman 1989(1985):137=2010:168)。そしてこう言う。「メディア教育は、自己の利益のために情報を作り出す者と、それをニュースや娯楽として素朴に消費する者との間に存在する知識と権力の大きな不平等に挑んでいく際、教師や生徒が持っている、数少ない手段の一つ」である(Masterman 1989(1985):11=2010:17)。マスターマンは、マスメディアの提供する商品をめぐって、制作者と消費者の間にある不平等を問題視するのだ。

このような考えを聞いて、アルチュセール(Louis Althusser)のイデオロギー論やグラムシ(Antonio Gramsci)のヘゲモニー論を想起する読者も多いだろう。バッキンガムはアルチュセールらをほとんど取り上げない。それに対してマスターマンは、自らの理論的基盤としてトムソン、ホガートらと同列にアルチュセールらを並べ、その重要性を指摘している。とりわけ彼は、アルチュセールの「呼びかけ」という概念に注目し、そこからマスメディアの機能を導き出している。「マスメディアの最大の存在意義は、娯楽やニュースを作ることではなく、(主体としての)私たちがテキストを了解し、そのテキスト(および私たち自身)を理



解可能なもののできるような位置の射程を開示することで、まず私たち（すなわち、特定の意識形態）を生み出すことである」（Masterman 1989(1985):237=2010:294）。生徒たちは、「たとえばキャスターやコメディアン、または新聞のコラムニストなどの）しばしば直接的な呼びかけを通して、しかしより頻繁には、それとなく、（映画やテレビの場合に）物理的かつイデオロギー的な主体の『位置』を与えられることを通して、テキストによっていかに呼びかけられるかを検証する必要があるだろう」（Masterman 1989(1985):237=2010:294-295）。

これに対して、バッキンガムはマスターマンの教育論が虚偽意識としてのイデオロギーという基本的な定義から生じていると指摘する（Buckingham 1986:82）。そして次のようにマスターマンへ問う。「誤ったイデオロギーとは正確な情報の欠如から生じるのか。そしてそれは、『もう一つの現実（alternative realities）』と直面するだけで消えるのか」（Buckingham 1986:82）。バッキンガムによれば、マスターマンは、プロセス、すなわち学習のプロセスだけではなく、メディア・テキストの読解のプロセスをも犠牲にして、内容の明確化に夢中になりすぎていると言うのだ（Buckingham 1986:93）。

バッキンガムによるマスターマン批判の根拠は、カルチュラル・スタディーズのオーディエンス研究をリードし、ホルの弟子であるモーレー（David Morley）の見解である。モーレーは、イギリスを代表する報道番組『ネーションワイド』のオーディエンスに注目し、次のように言う。「テキストの意味は読み手によって関連づけられた言説（知識、偏見、抵抗など）に応じて様々に構築されるのであり、オーディエンスがどれくらい自由にできる言説をもつのか

が、オーディエンス／主体とテキストが出会う際に重要となる」（Morley 1980:18）。言説は、オーディエンスの社会的布置（階級、職業、エスニスティー、性別等）も含めた諸要素が複雑かつ政治的に絡み合い構築される。そしてその範囲に応じて、マスメディアとオーディエンスの読解・接触は決定されている、と。バッキンガムはこの立場に立ち、マスターマンが考えているよりも、オーディエンスとマスメディアの接触は複雑であり、オーディエンスのマスメディアに対する自律性も確認できると批判するのだ。

マスターマンは即座に反論する。「バッキンガムはテキストそれ自体に存在するイデオロギー効果を意識していない」。そしてバッキンガムの依拠するモーレーの見解を手がかりにしながら、「全ての意味は等価ではない。意味は支配の中で組織される。けれどもその意味は決して固定されているわけでも閉じているわけでもない」と述べる。「バッキンガムはマスメディアの中にあるごまかしを否定するのか」と反論するのだ（Masterman 1986:98）。バッキンガムは、マスターマンの反論に答えていない。その代わりに、論争の翌年1987年に初の著作『バグリック・シークレット』を出版する。これは、『イーストエンダーズ』という連続テレビドラマのオーディエンスを分析したものである。バッキンガムによる九歳の子どもたちへのグループ・インタビューを参照しよう（Buckingham 1987:178）。

ヴィッキー「アンジー（ドラマの登場人物：引用者）は自分が言いたかったことを言ったわけじゃないわ。彼女がそう言わなくっちゃいけないってあいつらが彼女に話したのよ」。  
バッキンガム「あいつらってだれ？」  
マーク「台本書いている人」



ヴィッキー「脚本家やそういった人たちね。彼が来て、台本を渡したら、みんなそれを読まないといけないの。暗記するまで何度何度も繰り返し、覚えきるのよ。彼女は、脚本家からもらったものを言わないといけないの。彼女は自分の好きなことを言っているわけじゃないの」。

バッキンガムは言う。「子どもたちは次から次へと感動したり、熱中したり、おもしろがったり、飽きたり、嘲ったり、不真面目になったりしていく。このように、子どもたちは基本的には楽しみながら、異なる位置の間を移動することができるのだが、このことは、テレビとの関係を規定するにあたって、子どもたちがかなりの程度自律性を有していることを示している」(Buckingham 1987:200)。彼は、9歳の子どもでも、マスメディアの情報について理解している実態を描き出す。

## 2. 広告制作の教育実践

1990年代に入ると、バッキンガムは中等学校の(元)教師らと授業を実践し、共同研究を活発化させていく。11歳から12歳を対象にした広告に関する授業を取り上げよう(Buckingham, Fraser and Mayman 1990:21-23)。

この授業は、4つのステージに分れる。第1ステージ(1時間)では12本の広告を視聴し、教師の机間指導の下でテレビ広告について知っていることを議論する。第2ステージ(2時間)は、12本のうち3本(自動車メーカー(Fiat Croma)、ベーコン風味のスナック(Smiths Bacon Fries)、ナッツ(KP Nuts))の広告に絞り、生徒らはグループに分かれ、それぞれのグループで一つの広告を分析する。生徒らは、広告のターゲット、使用されている音楽、行為、言葉などの異なった側面から広告を分析し、

ワークシートにまとめていく。第3ステージ(2時間)においては、教師が主導的な役割を担う。教師は、第1ステージで提示した12本の広告のうち、これまでに取り扱っていない広告を取り上げる。そして、教師主導でカメラの位置やアングル、コメント等に注目し、広告のストーリーと内容を整理する。第4ステージ(8時間)は、生徒がテープまたはスライドで1分間の少年用ヘアケア商品の広告を制作する。そして最終的に、プレゼンテーションを行う。

バッキンガムはこの実践を振り返り、次のように考察している。生徒らは、確かにあるケースでは、広告に魅了されていたが、大変シニカルで無関心ですらあった。またメディア理解について言えば、第2ステージの3本の広告のうち、自動車の広告が大人向けであり、残りの2本が若者向けであることも即座に理解した。バッキンガムは言う。生徒たちは「当初から持ち合わせているよりも、より批判的になる必要はないように思えた。私たちが暗に重要であると思っている情報のほとんどは、すでに慣れ親しまれ、共通項であった」。(Buckingham, Fraser and Mayman 1990:21)。

この実践を手がかりにして、バッキンガムは、マスターマンのメディア批判の教育論を次のように特徴づける。それは、「教師自身が重要であるとするものへの同一化を要求し、ある既定された結論へ導こうとする。生徒による分析は教師による読解のレプリカへと退行してしまい、異なる読みは単に主観的で批判的ではないものとして退けられてしまう」(Buckingham, Fraser and Mayman 1990:35-36)。それに対して自らの実践は、それぞれのステージが異なった学術的アプローチを有しており、次のような特徴を持つと言 う (Buckingham, Fraser and Mayman





1990:21)。彼によれば、第1ステージは、生徒の既存知に注目するオーディエンス研究、第2ステージは、システマティックな分析を行うメディア研究である。第3ステージは、教壇スタイルをとって、直接的に情報を提供する。第4ステージは、オープンエンドで、生徒自らが自分のアイデアを提案している。

これらの見解から明らかなことは、バッキンガムがマスターマンとの差異を強調していること、そして彼が関わった教育実践はその裏付けとなっていることである。ここには、ファーガソンらと同様に、「メディア制作の教育論それともメディア批判の教育論」と二つの理論を比較するバッキンガムを見出すことができる。

しかしながら、思い出すべきはこれらの議論が時代背景としてとりわけ、2つの大きな契機を持っていることである。第1に、サッチャリズムのイデオロギーであり、第2に、パンクロック等の文化の創造に関わった若者の姿である。あえて単純化すれば、バッキンガムのメディア制作の教育論が強調したのは、文化の創造に関わった若者の姿である。そしてマスターマンのメディア批判の教育論が強調したのは、サッチャリズムのイデオロギーである。双方は差異を有すると言うよりも、当時のイギリス固有の社会的文脈がもたらした同じ性質の教育理論である。

さらに興味深いのは、バッキンガムが教育実践に関わった1990年代は、イギリスのメディア教育を取り巻く環境がより具体的に目に見える形で変化する時期でもあった。1990年にサッチャー政権は終わりを迎えたが、メディア教育はサッチャー政権下でスタートしたナショナル・カリキュラムの中に位置づいていく。つまり、メディア教育の制度化（カリキュラム化）である。まさにサッチャー退陣のその年、メディア教育は、キーステージ3以上（11歳

～14歳）の英語科ナショナル・カリキュラムの「読解」領域にはじめて位置づけられるのだ。ここでは「議論や作文の中で、文学以外のメディア作品における表現テクニックと決まりごとを評価し、その利用がもたらす効果を判断する能力」の育成が謳われていた（Department of Education and Science and the Welsh Office 1990:11）。上杉の言うように、カリキュラム上の扱いは軽く、各メディアの特性を理解するにとどまり、マスメディアの構成性の視点は乏しい（上杉 2008:55）。あらゆるメディアを駆使すること、メディア・コンテンツを制作することを通して、各メディアの特性を理解する教育実践の方がメディア批判の教育論よりも好まれる傾向にあった。

また1990年代になると、メディア技術が大きく変化する。1990年代半ばにはインターネットが普及し、社会の中に浸透していく。つまり、メディア技術の変化である。バッキンガムは、この変化をデジタル技術の普及と捉え、次のように言う。「デジタル技術は、あらゆるメディアを統合し、制作者と消費者の境界線を曖昧にしている」（Buckingham and Sefton-Green 1994:215）。先述したようにマスターマンによれば、メディア教育の意義は制作者と消費者の間に生じる不平等を問題視することであった。そのため当初から、マスメディアのイデオロギー性を重視し、新たな情報機器の使用に消極的であった。それに対して、バッキンガムは次のように述べる。「生徒にとっては言語を学ぶだけでも、あるいは近代メディアにおいて書くことができるようになるだけでも不十分である。彼らは、書くことのプロセスを振り返り、快楽や意味の形成過程を理解し、社会的なコミュニケーションを制約し形成する方法を理解しなければならない」（Buckingham, Grahame and Sefton-Green 1995:223）。パッ



キングダムが求めるのはメディア批判だけではなく、生徒たちのさらなるメディア理解である。

### おわりに

バッキンガムは、1986年マスターマンと論争し、翌年出版された最初の著作『パブリック・シークレット』で「子どもの自律性」を唱えた。そして1990年代に入ると、授業の分析・実践を通して、生徒らのマスメディアに対する態度を描き出し、「子どもの自律性」の実態を記述する。このようにして「マスメディアのイデオロギー性」に対して抗うメディア批判の教育論から、「子どもの自律性」に基づくメディア制作の教育論への転換を試みたのだ。この点に注目するならば、バッキンガムの試みは、メディア批判の教育論に代わるオータナティブであると理論上総括できるかもしれない。

しかしながらその社会的文脈に注目するならば、見過ごすことができないのは、双方とも商品としてのメディアというメディア概念を共有している点である。そしてこの見解にアルチュセールらマルクス主義の影響があることを考えるならば、次のことも明らかになる。バッキンガムは生徒とメディアの関係を問い、メディア制作による文化の創造を推奨する。それは結果的に、メディア理解を通してイデオロギーや権力に抵抗する主体の育成を目指したものである。それは同時に、マスターマンが理想とするメディア教育後の子どもの姿とも言える。理想と現実という差異はある。しかしながら、彼らはメディア概念だけでなく、メディア教育で求める生徒観もまた一致しているのだ。そしてこの生徒観は、サッチャリズム、BBCの圧倒的な影響力の下で、メディア技術を使用して文化を創造する生徒を指している。それは、ホガートの描き出した『ベッグ新聞』と関わる労働者階級やパンクロックやレゲエ、そしてクラブ文

化を独自に発展させたロンドンの若者たちと連続性を有している。バッキンガムが描いたテレビドラマを冷めた視線で視聴する九歳の子どもたち、広告を冷静に分析し、新たな広告の制作に参加した生徒たちは、まさにイギリスにおけるメディア教育が共有する生徒観を具体化した存在と言えよう。

バッキンガムは、2003年にこれまでの研究をまとめる形で『メディア教育』を出版し、メディア制作の教育論を理論的に完成させる。バッキンガムは言う。「メディア教育は、批判的な理解と能動的な参加の両方の発達を目指している。メディア教育は、若い人たちがメディアの消費者としてメディアを解釈し、十分な情報を得たうえで判断することを可能にする。しかしまた、自分の力でメディアの創り手になることも可能にする。メディア教育は若い人たちの批判的な能力と創造的な能力の両方を発達させるのである」(Buckingham 2003:4 = 2006:9-10)。

言語論的転回以降の教育哲学の観点から捉えるならば、このようなバッキンガムのメディア制作の教育論は、メディアがいかに生徒の考えや行為を構成しているのか。さらに、メディアと生徒の関係自体もメディアが構成している可能性を明示できない限界を有する。しかしながら、バッキンガムの試みはカルチュラル・スタディーズの伝統を引き継ぎ、言語論的転回以降の教育哲学が描いていない、個別具体的な政治を中心とした社会の中にメディア技術やメディア環境を位置づけ、具体的な教育実践を構想した。メディア技術やメディア環境が日々変化し、その時の政治、制度とのかかわりの中で意味を持つことを考えると、この可能性は看過できない。メディア教育は、個別具体的な社会的文脈の中にメディアを位置づけ、そのかかわりの中で教育実践を構想すべきである。その方向性を



指し示した点にバッキンガムのメディア制作の教育論の意味があったのではなからうか。

## 注

(1)バッキンガムの経歴を紹介しよう。彼は1954年生まれで、ケンブリッジ大学を卒業した。その後、中等学校の教員を経て、1984年からロンドン大学教育学研究所で勤務し、同研究所内子ども・若者とメディア教育センターの所長を歴任した。1993年ロンドン大学で教育学の博士号を取得している。ロンドン大学を退職後、2012年からラフバラー大学の教授に就任した。現在はフルタイム勤務からは退き、イギリス国内、ノルウェーなどで客員教授を勤めている。

(2)本稿がここで想定しているのはイギリスにおけるメディア教育とカナダにおけるメディア・リテラシー運動を次のように結びつけることである。上杉によれば、イギリスのメディア教育は、制度化によってメディア産業振興策に組み込まれ、社会批判的な方法論は後退したとされる。しかしながら、「イギリスの批判的なメディア教育学は、カナダ・オンタリオ州の教師たちによって受け継がれたのであった」（上杉 2008:87）。確かに、上杉の言うようにカナダの教師たちはメディア教育の思想やカルチュラル・スタディーズの成果を学び取り、それを日々の教育活動に翻案するように努めたと言えよう（上杉 2008:87）。しかしながら、ここで言う批判的メディア教育の内実はイギリスとカナダでは異なるものだろう。誰の何を批判の対象としたのか。イギリスとカナダの文脈は異なるはずである。本稿は、理論的に応用可能性を説くのではなく、同時代のイギリス固有の社会的文脈にイギリスにおけるメディア教育を位置づけ、その固有性を明示する。

(3)この著作は1957年に出版されて以降、再版

を重ねている。本稿は2009年のペンギン版のクラシックスを使用する。なお、邦訳も1974年に初版が出版されて以降再版を重ねているが、2003年版を使用した。

(4)バッキンガムによれば、カルチュラル・スタディーズとは「大衆文化の実践と広く社会的権力の所有との関係を考察するもの」と広義に定義づけ、「文化実践の政治的な次元と主として関係する」と述べている（Buckingham 2008:220）。そしてその一部であるオーディエンス研究は、「マスメディアの意味と快楽がどのように構築され、規定され、循環しているのかを問うことを通して、社会的プロセスを理解することにある」（Buckingham 2008:226）と言う。このことを踏まえるならば、ホガートの着眼点と記述した内容は、バッキンガムの依拠するカルチュラル・スタディーズの先駆けと捉えることができよう。

(5)ホールは1986年の論文「カルチュラル・スタディーズ—二つのパラダイム」で、トムソン、ウィリアムズ、ホガートらの立場をひとくくりにして「文化主義 (culturalism)」と称している。それに対して、自らの立場はアルチュセールの考えを受容した、「構造主義 (structuralism)」であるとしている。後述するように、このホールの立場は、言語論的転回後の記号論の視座にしたがっており、その後のメディア教育に踏襲された基本的な視座と言えよう (Hall 1986)。

(6)実際、1979年から1983年までの第1次サッチャー政権では、イギリスのGDPはおよそ4%、工業生産は10%、製造業生産は17%それぞれ下落している。さらに、失業率は同時期141%上昇し、失業者は300万人に達している (プロスター 2006:157)。

(7)本書は、1985年にコメディア出版社より出版され、その後1989年にルートリッジ社がペーパーバックで再版した。本稿ではこの再版



を使用する。

## 文献

- Buckingham, D. (1986) *Against Demystification: A Response to "Teaching the Media"*, *Screen* 27 (5), 80-95.
- (1987) *Public Secrets: EastEnders and Its Audience*, BFI.
- (1998) *Media Education in the UK: Moving Beyond Protectionism*, *Journal of Communication* 48 (1), 33-43.
- (2000) *After the Death of Childhood: Growing up in the Age of Electronic Media*, Polity.
- (2003) *Media Education: Literacy, Learning and Contemporary Culture*, Polity. = (鈴木みどり他訳) (2006) 『メディア・リテラシー教育』世界思想社。
- Buckingham, D. (2008). *Children and Media: A Cultural Studies Approach*, K.Drontner and S.Livingstone eds. *The International Handbook of Children, Media and Culture*, 219-236.
- (2010) Interview by Dee Morgenthaler. Friday, Oct. 29. *Voices of Media Literacy: International Pioneers Speak: David Buckingham Interview Transcript*, Center for Media Literacy, 1-8. [http://www.medialit.org/sites/default/files/Voices of ML David Buckingham.pdf](http://www.medialit.org/sites/default/files/Voices%20of%20ML%20David%20Buckingham.pdf) (2016年7月25日閲覧)
- (2011) *The Material Child: Growing up in Consumer Culture*, Polity.
- Buckingham, D. & J. Sefton-Green (1994) *Cultural Studies Goes to School: Reading and Teaching Popular Media*, Taylor&Francis.
- Buckingham, D., J.Grahame and J.Sefton-Green (1995) *Making Media: Practical Production in the Media Education*, English and Media Centre.
- Buckingham, D., P.Fraser and N.Mayman (1990) *Stepping into the Void: Beginning Classroom Research in Media Education*, D.Buckinham ed. *Watching Media Learning: Making Sense of Media Education*, The Falmer Press, 19-59.
- Department for Education and Employment (1999) *English: National Curriculum for England*.
- Ferguson, R. (1998) *Representing 'Race'*, Arnold.
- Hall, St. (1986 1st publish 1980) *Cultural Studies: Two Paradigms*, R.Collin, et. al., eds., *Media, Culture and Society: A Critical Reader*, Sage, pp.33-48
- (1988) *The Hard Road to Renewal: Thatcherism and the Crisis of the Left*, Verso.
- (2002 1<sup>st</sup> publish 1978) *The Politics of 'Mugging'*, St., Hall et. al., eds., *Policing the Crisis: Mugging, State, and Law and Order*, Palgrave, 327-397.
- Hoggart, R. (2009 1<sup>st</sup> publish 1957) *The Uses of Literacy: Aspects of Working-Class Life*, Chatto & Windus. = (香内三郎訳) (2003 初版 1974) 『読み書き能力の効用』晶文社。
- Masterman, L. (1980) *Teaching about Television*, Macmillan.
- (1986) *A Reply to David Buckingham*, *Screen* 27 (5), 96-100.
- (1989 1<sup>st</sup> publish 1985) *Teaching the*



- Media*, Routledge. = (宮崎寿子訳) (2010) 『メディアを教える—クリティカルなアプローチへ』世界思想社。
- (2001) *A Rational for Media Education*. R.Kubey ed. *Media Literacy in the Information Age: Current Perspectives*. Transaction Publishers. pp.15-68
- Morley, D. (1980) *The Nationwide Audience: Structure and Decoding*, BFI.
- Thompson, D. (1964) Introduction, D.Thompson ed., *Discrimination and Popular Culture*, Penguin.
- 今井康雄 (1998) 『ヴァルター・ベンヤミンの教育思想—メディアのなかの教育』世織書房。
- (2004) 『メディアの教育学—「教育」の再定義のために』東京大学出版会。
- 上杉嘉見 (2008) 『カナダのメディア・リテラシー教育』明石書店。
- 小笠原博毅 (1997) 「文化と文化を研究することの政治学—ステュアート・ホールの問題設定」『思想』873号、岩波書店、41-66頁。
- プロスター, J. (小笠原博毅訳) (2006) 『ステュアート・ホール』青土社。
- 毛利嘉孝 (1998) 「インディペンダント・インタヴェンション—ホールの70年代」『現代思想』第26巻4号、青土社、208-221頁。
- (2003) 「テレビ・オーディエンス研究の現代的地平」小林直毅他編『テレビはどう見られてきたのか』せりか書房、208-228。
- 矢野智司 (2014) 『幼児理解の現象学—メディアが開く子どもの生命世界』萌文書林。

(本研究は平成27～29年科研費「いじめ問題の解決に向けたメディア論的な教材・指導プログラムの開発」基盤研究(C)(一般)課題番号15K04527による研究成果の一部である)



## The Historical Meaning of Media Production Theory: Focusing on D. Buckingham

Kei Tokitsu

This paper examines the historical meaning of David Buckingham's media production theory. We have located media education in the UK within the changing social and cultural climate of their times; and in particular related them to Richard Hoggart, Stuart Hall and Thatcherism. Len Masterman considered that the media are produced. Media education is the instruments which teachers and students possess for beginning to challenge the great inequalities in knowledge and power which exist between the producer and the consumer. For Buckingham, media education aims to develop both critical understanding and active participation. It enables students to interpret and make informed judgements as consumers of media, and it also enables them to become producers of media in their own right. Media education is about developing student's critical and creative abilities.

This paper examines the historical meaning of Buckingham's media production theory, by focusing on social context of their times and his educational practice. And, we clarify that his media conception is the media as the commodity. He makes a demand for resistant to the commodity on students by their producing critical participation in media. We explore that this theory has the limitation which they cannot describe how media construct student's thought and their activities. However, it is effective for resisting the political power by using media technology.

キーワード (Key-Words) : バックingham (David Buckingham)、メディア教育 (Media Education)、教育実践 (Educational Practice)

所属名 : 広島文化学園大学 学芸学部 子ども学科

Faculty of Arts and Sciences, Hiroshima Bunka Gakuen University